

歴史的文化財を活用した総合的な学習の時間の在り方 ～聖南中学校善光寺街道グループが目指す地域を活性化するウォークイベント～

筑北村立聖南中学校 中村淳志

1 はじめに

本校では、総合的な学習の時間を使ってふるさと学習「あずまやタイム」に取り組んでいる。あずまやタイムは、全校生徒が縦割りのグループに分かれ、「筑北村のために中学生ができること」を探求する時間である。

グラウンドデザインにも「筑北村の魅力を探求し、ふるさとを愛する心を育てる」が学校目標具現のための重要な柱として位置付いており、地域とつながった活動や、校内のグループ間の連携を重視することとしている。

私は「善光寺街道グループ」を担当。歴史的文化財である善光寺街道を活用して生徒のふるさとを愛する心を育て、地域を活性化する活動に4年間取り組み、令和5年度と本年度、生徒主体の「善光寺街道ウォークイベント」を開催した。このイベントは村内の善光寺街道約9km歩きながら歴史的な文化財を中学生が解説するものである。

本稿はこれまでの4年間の活動と、その活動を通して見えてきた、総合的な学習の時間における地域の歴史的文化財の活用方法の在り方を述べるものである。

2 イベントの開催に至るまでの2年間の取り組みと課題設定

(1) 課題設定に悩み、光明を見いだした1年目

本校に赴任して、善光寺街道グループを担当1年目の活動で、悩まされたのは課題設定だった。はじめは善光寺街道の存在はおろか、筑北村についてほとんど知らない状態だった。あずまやタイムの目標「ふるさとを愛する心」を、善光寺街道を活用してどのように育むことができるのか。課題設定どころか、何の見通しを持ってないまま、活動が始まった。

第1回目の授業で生徒とどんな活動をするか話し合い、生徒が「善光寺街道のことを知りたい」と言ったため、図書館やインターネットで街道を学び始めた。文献資料から情報を得ることに難しさがあったことから、地域学校協働活動推進委員で、善光寺街道協議会会長・NPO法人善光寺街道歩き旅推進事務局理事長の小瀬佳彦さんに協力を依頼することにした。打ち合わせをし、1日総合の日に善光寺街道の名所（姨捨・稲荷山宿・川中島古戦場）と善光寺にバスで移動し、小瀬さんの解説を聞く学習活動をするようになった。小瀬さんは善光寺や街道に詳しいだけではなく、街道を歩くイベントで案内人としての経験が豊富な方で、話が非常にわかりやすかった。生徒たちは自分からメモを取ったり、進んで質問したりして主体的に学んでいた。この1日総合の日の学習で、いにしえの人々が、強い願いや憧れを持って善光寺を訪れていること、そして全国各地からの参拝者が善光寺に向かう旅の街道が自分の村を通り、宿場町として栄えていたことを改めて知る機会となった。

充実した学習活動の一方で、私の課題設定に対する疑問は残ったままだった。そこで帰りのバスで小瀬さんに「善光寺街道グループで、筑北村をどのように活性化できるでしょうか。」と質問をしてみた。すると「中学校や中学生が中心となって善光寺街道を歩くイベントを開けばきっと地域のためになるし、生徒も自分の地域のことを誇りに思うようになります。ぜひ挑戦してみてください。私もどんな協力もします。」と答えてくださった。この言葉を聞いた私は、地域の歴史を学ぶことを目的にするのではなく、手段として活用していくことが必要であると気づかされた。

後日、生徒にイベントの話をする「やってみよう」と力強く語ったため、イベント開催を目標とすることが決定した。

(2) 活動の目的が明確になった2年目

2年目の5月、小瀬さんから「新聞社が主催する善光寺街道を歩くイベントで中学生に解説をさせてみないか」という提案をいただいた。学校全体でのあずまやタイムが始まる前だったため、前年度に善光寺街道グループに所属していた生徒に声をかけると、参加に

前向きな様子で、9人の生徒が参加することになった。放課後や休み時間に解説文作りや練習に励み、準備を進めた。

イベント当日は青柳宿の歴史を生徒が解説。イベントの参加者からは「よく調べて話をしているね」「中学生が一生懸命解説してくれる姿が良かった」などの感想をもらった。生徒は充実感を得ながらも「もっと大きい声で、わかりやすく話したかった」と反省を口にした。このイベントへの参加を通して生徒たちは、様々な人に村の歴史や魅力を伝える意義に気づいた。また、村外の人からの「筑北村はすごいね」「宿場や道祖神を大切にしているね」といった声から、自分たちでは気づけなかった村の魅力に改めて気づかされる機会にもなったようである。



イベントで「大切り通し」を解説する様子

この体験を通じた気づきが弾みとなり、その後の活動では中学生が主催するウォークイベントの開催を目指して、街道の学習に取り組んだ。生徒たちは「街道の魅力を伝える」という目的意識を持ち、それまで以上に意欲的に学んでいた。

(3) あずまやタイム善光寺街道グループとして設定した探究課題

ここまでの2年間の実践と研究から、歴史的文化財善光寺街道を活用した総合的な学習の時間の在り方を、長野県教育課程編成・学習指導の基本を参考にして構造化したものが以下の図である。

<p style="text-align: center;">生徒の視点から</p> <p>① 生徒の興味・関心の理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・筑北村の歴史や文化財に興味がある一方で、それらが持つ価値の理解が不十分である。また、「難しそうだ」といって歴史を学ぶことを敬遠している様子も見られた。 ・市民タイムスのイベントに参加したところ、歴史を学ぶこと以上に、伝えることにやりがいを感じていた。 <p>② これまでの学習とのつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「村にある歴史的文化財の素晴らしさをたくさんの人に広めたい」「村内外からたくさんの人に来てもらい、自分たちの村を活性化させたい」という思いが生まれ、追究が深まりそうである。 ・「どうすればたくさんの人に来てくれるか」「来てくれた人に喜んでもらうにはどんなイベントにすればよいか」という問いが生まれ、追究が深まることが期待できそうである。 	<p style="text-align: center;">学習対象から</p> <p>対象の教材化</p> <p>善光寺街道協議会の小瀬さんや村役場観光課と協働し、善光寺街道の魅力を発信することは、村の魅力の再発見につながり、よりよく課題を解決し自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成につながるだろう。</p>
<p>学習の過程の視点から</p> <p>① 育成を目指す資質、能力</p> <p>筑北村の「ひと・もの・こと」に関わる課題を、善光寺街道を活用する視点から見つけ、学んだり体験したりすることを通して学び方やものの見方・考え方を身につけ、学んだことを効果的にまとめたり、発表したりすることができる生徒の育成を目指す。</p> <p>② 探究的な学習の過程</p> <p>より良いイベントを開催しようとグループで協力して課題解決に向かう中で、課題の設定・情報の収集・整理・分析・まとめ・表現の一連の学びを繰り返し、学びが深まることが期待できるだろう。</p>	
<p>課題</p> <p>村内にある善光寺街道は江戸時代から栄えてきて、石畳や石仏、切り通しなどの貴重な文化財があるが、村内の人でもそれらについての知識や価値を理解する人が少ない。街道について学習を深めた生徒たちは、自らが住む地域には誇るべき文化財があることに気づき、村内の善光寺街道を広める活動に自ら取り組むだろう。</p>	

3 ウォークイベント開催（3年目の実践と記録）

(1) 総合的な学習の時間の時間の目標を達成するための取り組み

聖南中学校「総合的な学習の時間の全体計画」(参考資料1) 育成を目指す具体的な資質・能力を身に付け、「めざす生徒の姿」の実現のために取り組んだことが2つある。

1 つ目は、地域のために行動できる生徒の姿を目指し、イベントを他人事とせず取り組み、主体的に追究できる学習形態の工夫である。(学びに向かう力、人間性の育成)

2 つ目は、課題を解決するために協働して学び、良い課題解決の方法を、見つけ出した

めに、地域の人とつながる場を設定することである。(思考力、判断力、表現力の育成)

(2) ウォークイベントまでの準備の記録と生徒の学び

初めての試み、「善光寺街道ウォークイベント」開催を10月25日(日)と定め、4月の活動開始時からイベントまで、全11回の授業の取り組みを以下の表にまとめた。(○の数字は時数を示す。②であれば2時間扱い)

第1回② (4月21日)	○オリエンテーション。イベント開催という目標と、1年間の活動の見通しを生徒と共有。
第2回② (5月2日)	○「話すこと」練習。
第3回② (5月19日)	○イベント準備開始。コースと日程について協議。 ※小瀬さんと村役場観光課へのプレゼンテーションを6/30に設定。
第4回② (6月2日)	○イベント基本計画の立案
第5回② (6月16日)	・総務チーム・企画チーム・広報チーム3つのチームごとの検討 ・総務はイベント全般を担当。募集人数の検討や当日の細案作りや生徒の分担決めなどを決定。企画は、イベントの中で参加者が楽しめる内容の企画検討。広報は参加者の宣伝・募集方法を検討。
第6回② (6月30日)	○「イベント企画プレゼンテーション」の実施。小瀬さんと村役場観光課から意見、アドバイスをもらう。生徒には良い刺激となった。 ・協力者から提案内容を認められたこと、イベント参加を承諾いただいたことは、自信と安心感につながった。
第7回① (7月14日)	○企画案の再検討。 ・総務は所要時間を再検討。歩く速さや休憩時間など、高齢の参加者をイメージし再設定。広報は、観光課に提出する回覧のチラシと、村内放送の原稿づくり。企画は、通行手形づくりの準備、デザイン立案。
第8回② (8月29日)	○各グループ単位での活動。 ・総務チームは行動細案や分担決め。広報チームは村の広報放送の文章作成とチラシ作成等。企画チームは通行手形づくり準備。市民タイムスの取材を受け、イベントの宣伝。(参考資料2)
第9回⑥ (9月1日) 1日総合の日	○プレイベント(1日総合) ・当日のコース確認。小瀬さんによる解説法のレクチャー。 ・小瀬さんからの「地域の宝物である街道についての解説こそイベントの中心。」とのアドバイスに刺激を受け、イベントをいかに楽しくするかを考えていた生徒が、村内の善光寺街道のすばらしさを伝えることがイベントの目的であることに気づいた。
第10回② (9月8日)	○イベント準備(文化財の解説文づくりを中心に) ・総務チームは全体計画と行動細案を完成。企画チームは、地域から借用した焼印で「通行手形」を作成。
中間発表会 (9月30日) 文化祭	○文化祭での中間発表(イベントの練習として文化財の解説を実施) ・発表後の振り返りでは「もっと聞く人の顔を見て解説したい」「上手くできなかったから、イベント本番までに練習したい。」等の反省が出された。本番に近い状態で練習したことは有効であった。
第11回② (10月13日)	○最終打ち合わせ。 ・本番の動き確認。解説練習。解説を聞き合い、アドバイスし合った。



第5回。話し合う広報チーム



第7回。行動細案を再検討する総務チーム



第9回。1日総合で街道の学習をする。



第10回。通行手形を作る企画チーム



中間発表会。保護者や生徒を相手に解説をする。

(3) イベントの準備を通して育成を目指した生徒の資質・能力

①小グループ活動で主体性を育てる

準備では「総務」「広報」「企画」の3つのグループに分けて活動した。グループの編成は3つの学年の生徒がバランスよく配置するようにし、各グループ6人程度となるようにした。縦割り小グループでの活動により、生徒が責任感を持ち、協働して活動することをねらった。協力者（小瀬さん、役場観光課職員）へのプレゼンの場面では、リーダーが1年生にプレゼンの一部を分担。1年生は先輩に助けをもらいながら準備に取り組む姿が見られるなど、3年生がリーダーシップを発揮して話し合いを進め、一人ひとりが個性を生かして活動する姿が見られた。

異学年での関わりを増やすねらいとして、2年生に「来年は自分が中心になって取り組みたい」という意欲を高めることもあった。さらに、文化財や宿場についての解説についても異学年で関わるように分担をしたところ、一人ひとりが責任感を持って解説文を作り、練習に取り組んでいるように見えた。

②協力者へのプレゼンテーションで思考力・表現力を育てる

イベントへの協力を依頼した小瀬さんと村観光課職員に生徒が企画案をプレゼンテーションする場を設定することで、生徒の思考力、判断力、表現力の高まりをねらった。準備では、一人ひとりが責任を持って取り組む姿勢が見られ、積極的に意見を出し合っていた。本番では小グループの各リーダーを中心にプレゼンし、アドバイスをもらった。メモをしながら聞いたり、自分から質問したり、さらには新たな提案をしたりするなどの姿が見られた。この生徒の学びを、総合的な学習の時間の指導要領で示される「探究の過程における思考力、判断力、表現力等の高まり」の表にまとめた。



探究の過程における思考力、判断力、表現力の深まり				
【グループの課題】「善光寺街道を歩くイベントを開催し、地域を活性化させたい」				
	①課題の設定(第1~3回)	②情報の収集(第4回)	③情報の整理・分析(第5回)	④まとめ・表現(第6回)
総務	・村内の善光寺街道の魅力を伝えるにはどんなコースを歩き、どんな行程を計画すればよいか。	・昨年度参加した新聞社のウォークイベントの行程を参考にす。Google マップを使って距離を調べ、ストーリービューでコースの様子を確認する。	・新聞社のウォークイベントは筑北村と麻績村を歩いたが、私たちのイベントは筑北村の街道を歩くコースにしたい。Google マップで所要時間はわかるが、歩く速度について小瀬さんに相談する必要がある。	・コースは良い案だと認められた。行程は、女性がトイレの心配をするため、計画が必要だという助言をもらった。トイレの相談を観光課にすると、公民館や体育館を使う許可を得た。歩く速度は「お年寄りが参加することを想定したらよい」という助言を参考に考え直す。
広報	・どうすればたくさんの人にイベントを知ってもらい、参加してもらえるか。	・新聞などのメディアやSNSを活用することなど、アイデアを出し合う。	・SNSは使うのが難しいため地域の新聞社に依頼し、読者にイベントを広める。村内放送や回覧板で村内の人にも伝えるため、観光課にやり方を聞くという見通しを持つ。	・ウォークイベントは、若者よりも高齢者の方が参加することが多いことから、SNSよりも新聞に取り上げてもらうことが効果的だろうという助言をもらった。村内放送や回覧板の使い方について具体的な方法を教えてもらい、準備する。
企画	・参加者に喜んでもらうにはどんな企画をすればよいか。	・他のウォークイベントを、インターネットを使って調べ。また、どんな企画をしたら楽しかったかを話したり、先生に聞いてみたりしてアイデアを出し合う。	・焼き印を使った木札の「通行手形」をプレゼントしたら喜んでもらえそうだ。歴史的な街道を、着物を着たり被り物をしたりと雰囲気を出せるとかもしれない。できれば協力者に相談する見通しを持つ。	・観光課から「通行手形は良い案だが、木材を買うための資金をどうするかきちんと検討してから取りかかった方がよい。作るのも難しくて失敗もするから、余分に木材を用意したほうがよい」という助言をもらった。小瀬さんからは、衣装を着ることはよいが、安全に歩くことが何より大切だという助言をもらった。

プレゼンテーションでもらった助言を参考にして、新たに課題設定をし、小グループごとに内容を再検討した。指導要領でも示されている探究的な学習において①課題の設定②情報の収集③整理・分析④まとめ・表現が一連の流れとなり、再び課題を設定して探究活動が発展的に繰り返されるように学習活動になっていたと考えている。

4 イベント当日、反省会の記録と生徒の学び

総合的な学習の時間の目標「筑北村の筑北村を豊かにする取り組みの意義を、自分たちの生活と結びつけて考え、自己の将来を考えていく力」を育成するため、生徒が参加者と関わる時間を多くするようにした。また、イベントの終わりにはアンケートを依頼し、生徒と様々な角度からイベントを振り返ることができるようにした。また、イベントの準備から当日、反省までの一連の流れを通して、社会に参画する態度を養い、探究的な学習の良さを理解できるように生徒の学びに寄り添うことを心がけた。

(1) イベント当日の記録

①集合・はじめの会

計画に沿って準備を整え参加者を迎えた。はじめの会においてリーダー生徒が「筑北村の善光寺街道の魅力がみなさんに伝わるように、精一杯解説をします」と話すと、参加者から拍手が起きた。参加者の中学生に対する温かい眼差しと、イベントへの期待を感じる瞬間であった。



②立峠石畳・乱橋宿

石畳の入り口に到着後、各グループ単位で自己紹介をして歩き始めた。自己紹介では、筑北村の魅力や、聖南中学校の紹介なども交え、参加者と打ち解けるように頑張っていた。石畳の道の歴史的背景や、乱橋宿の地名の由来、宿場のつくりなどを解説すると「へ～」「そうなんだね」などの声が上がっていた。生徒も一方的に解説するのではなく、参加者とやり取りをしようと努力する場面もあり、和やかな雰囲気で行進していった。



この頃になると中学生、参加者ともに打ち解けはじめ、会話が弾んでいる様子が多く見られた。参加者の中には、70年前に聖南中学校を卒業した大先輩もいて、「街道は私の通学路でした。イベントは街道を歩くチャンスだと思って参加しました」、「ここの建物には昔、にわとりがいたんだよ」などと中学生に紹介し、中学生が驚く場面は微笑ましいものだった。コース決定時、乱橋宿から中学校までは距離が長すぎるのではないかと心配が出されたが、「話しながら歩いていたらあっという間だった」と生徒が話すように、晴れた気持ちの良い気候の中でウォーキングを楽しんだ。

③聖南中学校での昼食休憩

聖南中学校の体育館で昼食休憩。ここから企画チームが企画・提案した、あずまやタイムの他グループのイベント参加。「料理グループ」は、地域食材を活用して、「焼きたて屋」とコラボメニュー開発に取り組んできた試作品を参加者に配付し、味や見た目などの感想をもらった。「村おこしグループ」は、作成した村内観光マップ配付。アトラクションとして「太鼓篠笛グループ」が地元の伝統芸能「四阿屋太鼓」を披露すると会場から大きな拍手がおきた。



④青柳宿・大切通し

青柳宿では「戦国時代の青柳宿」、「宿場町としての青柳宿」、「大切通しの歴史」の3カ所で解説した。村内の参加者からは「村に住んでいて、青柳宿には何回も来たことがあったが、歴史やつくりなど知らないことがたくさんあった。」という声も聞かれた。解説を担当した生徒のうち数名は、前年度、新聞社主催のウォークイベントに参加して解説の経験があったこともあり、経験を生かし堂々と話していた。



大切通しの解説を終え、グループごとに写真撮影をして終了。事前に小瀬さんから「イベントが終わった後の時間を大切にしてほしい。その日の感想や振り返り、改善点などをどんどん話してもらえらるから、積極的に話しましょう。世間話をするのもよいです。中学生の皆さんとたくさんお話ししたことが大きな思い出なんです。」とのアドバイスがあった。小瀬さんの話したとおり、参加者と中学生が自然発生的に集まり会話をする姿が多々見られた。後に会話の内容を聞くと、「1日とても楽しかった。ぜひこれからも続けてね。」「中学生のみなさんはよく調べていて感心しました。」などの声をいただいていたようである。解散時、生徒たちの清々しい表情が印象的だった。



(2) イベントの振り返り

イベント後の「あずまやタイム」で振り返りを行った。以下は生徒が記述した反省や感想の一部である。

「イベントの準備について」

- ・プレゼンテーションや説明の練習を繰り返したのは当日に生かした。
- ・広報筑北や新聞などで告知し見た人や聞いた人の全員が来たわけではないけれど、多くの人に私たちの活動を知って貰えたと思う
- ・プレゼンを何回もして、相手にどれだけ自分が伝えたいことが伝わるように工夫して、成長することができた。

「イベント当日について」

- ・歩くスピードが速く差が開いてしまった時もあった。
- ・みなくる館から聖南中までのトイレ休憩が無さ過ぎた。
- ・説明以外の質問に答えられなくて困った。話のネタがなく準備不足だった。
- ・トイレ休憩が少し長かったのでみなくる館を出るのを少し早くてもいいと思った
- ・乱橋は坂で一本道を説明していく感じだったから、けっこう説明しやすかった。問題とかも出しながらおもしろく説明することができた。
- ・歩くペースをもう少し考えたほうがいいと思う。
- ・全体的に時間配分や歩く速度などは良かったから細かなところはもうちょっと気にして動ければ良かった
- ・通行手形をお客さんに喜んでもらえてよかった。来年も通行手形などのお土産を渡したい。
- ・解説するときに参加者の方々の表情や反応をうかがいながら解説をしたので、より話が伝わったと思う。

「解説をやり切った」「参加者に喜んでもらえた」などの言葉から、生徒たちがイベントをやり遂げたという充実感を持っていることがわかる。一方で、歩く速度や日程、役割分担についてなど、改善点が具体的に出されており、準備から当日の運営に至るまで、生徒が他人事としてではなく、「自分たちが主催する」という思いを持ち、主体的に取り組むことができたと考えられる。また、「もっとわかりやすく解説をしたかった」「解説をして質問をされたのに答えることができなかつたから、もっと勉強しておけばよかった」という反省が多く出された。イベント準備に時間を要していたため、解説の準備の時間を十分に確保するように計画できなかったことが要因だった。9月1日の1日総合の日に小瀬さんから解説が一番大事だと話されていたが、イベントを終えて生徒も私自身もそれを痛感した。次年度のイベントでは筑北村の文化財の魅力をしっかり伝えることを2年生に引き継ぎ、私自身も課題とすることにした。

5 第2回ウォークイベントでの生徒の成長（4年目の実践と記録）

第2回目（令和6年度）は地域を活性化させるため、善光寺街道ウォークイベントに並行して全校生徒が参加する「あずまやマルシェ」を開催する全校行事とすることになったが、小瀬さんから全体の日程については大きな変更は必要ないと助言されたことから、マルシェ参加のために昼休憩時間を増やす程度の変更以外は第1回目と同様の日程で計画した。第2回イベントの準備から反省までの生徒の姿から、地域の歴史を学び、伝えることによる、文化財の活用について考えていきたい。

(1) 知識・技能の育成と探究的な活動の良さの理解

私自身の第1回目の反省として、生徒の知識および技能の育成が不十分であったことが挙げられる。その要因は私自身が生徒にどのような知識及び技能を身に付けさせるかが不

明確であったことがあると考えた。また、生徒たちが「第2回イベントでは解説に力を入れたい」と話したことから、地域の歴史を学び、学んだことをイベントで村内外の人々に伝えることを通してどのような知識や技能を身に付ければよいのか。指導要領や長野県教育委員会「教育課程編成・学習指導の基本」を参考にして、以下の目標を設定した。

- ① 自らが住む筑北村にある善光寺街道に関わる文化財の良さや、それらを活用して地域を活性化する意義を理解している。(概念的な知識の獲得)
- ② 地域の歴史的な文化財についての情報収集の技能を身に付けている。また、収集した情報を取捨選択し、参加者に適切に伝えることができる。(自在に活用することが可能な技能の獲得)
- ③ 善光寺街道に関わる歴史的な文化財の価値の理解と、それらを広める活動は、様々な人々の営みに関わりながら、探究的な学習に取り組んだことの成果であり、自らの行為が地域社会の未来に関わっていることに気づく。(探究的な学習のよさの理解)

(2) 「自在に活用することが可能な技能の獲得」を目指す解説の準備

解説の準備を早めに始めた。まずは前年度の解説文を参考に、文献資料やインターネットなどを使って情報を集め、自分たちなりの解説文を作り、読む練習を繰り返した。生徒たちに「その阿弥陀堂ってどんなもの?」「参加者のみんなはどんなことを知りたいと思う?」など、知識が深めたり、情報を取捨選択したりするように指導することを心がけた。また、小瀬さんに指導に来てもらい、わからないことを質問して街道の文化財について知識を深めた。また、9月には前年度と同様設定された「1日総合の日」に、小瀬さんの説明を聞いてさらに学習を深め、解説の心得を聞くことで話す力も少しずつつけていった。イベントで参加者に解説をするという目的があることで、生徒たちは意欲的に情報を集め、また、聞く人に魅力を伝え、納得してもらうために、集めた情報を取捨選択したり、わかりやすく並べ替えたりして、解説文を作り上げていった。



(3) 「探究的な学習の良さを理解」するための参加者とのふれあい

イベント当日は練習の成果を発揮し、担当したところの解説をやり切った。参加者は大きな拍手をし、「よく調べていてすごいね」「村に住んでいるけど知らなかった」と生徒に声をかけていた。解説をした全生徒の充実感に満ちた表情から、解説を通して自分が住む村にある歴史的な文化財の価値に生徒が改めて気づき、それを誇りに思うきっかけになるだろうと感じた。さらに、文化財について調べて解説をするという行為が、善光寺街道を貴重な観光資源にしていこうという、筑北村のより良い未来に貢献している自覚が芽生えるだろうとも感じた。



(4) 「概念的な知識」を獲得するために来年を見据えたイベントの反省

イベント後の反省では、前年度と同様に、各生徒が反省を記入した後にグループで話し合った。「解説の準備を精一杯したことで自分なりに良い解説ができた」といった内容が多くあり、第1回イベントの反省よりも解説について充実させることができたこと、生徒の反省から感じられた。

また、今年度は反省の項目に「来年に向けて」という言葉を意図的に組み込んだ。それは、善光寺街道を活用して地域を活性化する楽しさや必要感に気づいてほしいからだ。今年度の取り組みを振り返るだけでなく来年度を見据えると「もっとこうしたい」というものが湧き出てきて、善光寺街道という自らが住む地域にある歴史的価値のある文化財を活用した地域の活性化ができると再認識できる。

6 地域の歴史的文化財を活用した総合的な学習の時間の在り方

総合的な学習の時間でどのように地域にある歴史的な文化財を活用することができるのか。私が4年間の取り組みから考えたことを述べていく。

(1) どのような課題を設定するか

前述のとおり、イベントの開催に取り組む前は、歴史を学ぶことを目標としていたが、生徒の主体的な学びの実現には難しさがあった。理由の一つは、地域の歴史を学ぶことは、中学生が面白さを感じにくく、学ぶことの必要感も持ちにくいことがある。もう一つは、学ぶに留めずに発表することを想定しても、「誰に」「どのように」「どんな目的で」表現するかという必要感を持つのが難しいことである。イベントを経験した私が改めて実感するのは、歴史を学ぶことは一つの方法にすぎないということだ。課題は、文化財の学習自体ではなく、文化財のことを広めたり、文化財を活用して人を呼び込んだりすることを想定して設定することが適当だろうと考える。そうすることで、生徒は必要感を持ち、主体的に情報収集に取り組み、より良く伝えるために情報を選択し、整理し、表現できるように練習に取り組む、という追究のサイクルが生まれ、技能を身に付けたり、表現力を伸ばしたりすることが期待できるだろう。また、表現することが地域のためになると実感できれば、探究することの良さに気づき、主体的に取り組むことができるはずだ。地域の歴史や文化財を総合的な学習の時間に追究するときには、学習したことを、必要感をもって表現できる場を設定することが有効であることは間違いないと考えている。

(2) 地域の歴史の探究でどのように「ふるさとを愛する心」を育てるか

総合的な学習の時間の目標に「自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成」「積極的に社会に参画しようとする態度を養う」があり、本校のあずまやタイムでは「ふるさとを愛する心を育てる」を目標としている。これらの目標をどのように達成することができるだろうか。生徒の姿から考えていきたい。

事前に生徒には参加者といろいろなことを話すように伝え、イベントでは生徒と参加者が6つのグループに分かれて話しながら歩いた。どんな話をしたかを生徒に聞くと、村外からの参加者から「筑北村は自然が豊かでよいところだね」と言ってもらったと嬉しそうに語った。また、文化財の解説の後に「こんな素敵な街道や石仏があるなんて知らなかった。たくさんの人に教えてあげてね。文化財を守って行ってね」と言われたことも目を輝かせて語っていた。学校職員や保護者ではなく、普段関わらない村民や、村外の人からかけられる言葉は生徒の心に刺さり、「村の魅力をもっと伝えたい」という気持ちにさせたのだろう。この体験は、自分のふるさとを愛するきっかけになると確信している。総合的な学習の時間で追究したことを、学校から外へ、さらに地域の外へ広げることで、生徒が新たな発見をし、ふるさとを愛する心を育てることができるだろう。特に、生徒が文化財のもつ素晴らしさを強く認識するのは、地域内の人よりも、地域外の人からの「すごい」「守って行ってほしい」といった言葉によってではないだろうか。また、対面で関わるのが大きな効果をもたらすとも考えている。発信の方法はSNSを活用することもできるが、顔を合わせて生の声を聞くことが心を強く震わせることを生徒の姿から気づかされたからである。

(3) より地域と結びつき、地域を活性化させるマルシェの可能性

第2回イベント当日は、ウォークイベントと並行して、全グループ・全校生徒が参加する「あずまやマルシェ」を開催した。生徒自身が交渉し、他グループが連携している村内事業所や店舗等を中心に13の個人及び事業所の賛同を得ての開催となった。当日は生徒が販売に関わったり、太鼓の演奏をしたりして来場者をもてなした。その結果、保護者を含め大勢の来客者が訪れ、ほとんどの商品が売り切れるほど大盛況となった。

来年度は販売を地域やPTAに委任し、生徒はあずまやタイムの課題解決のためにワークショップや発表活



動をする計画がある。善光寺街道グループに限らず、村内外の人々と関わる機会を設け、学校全体で総合的な学習の時間に取り組み、地域を愛する心を育み、深い学びを実現できる可能性がある」と信じている。



8 終わりに

イベントの準備で生徒が「たくさんの人に来てほしい」「参加者を喜ばせたい」「わかりやすい解説をして魅力を伝えたい」などの言葉を再三つぶやいていた。はじめは「イベントを開催するのだから一生懸命取り組みたいのだな」と、特に気にせず聞いていたが、生徒の姿を見て、ほかの思いがあるのではないかと次第に感じるようになった。その思いとは「ふるさとを誇りたい」という思いである。過疎化が進む筑北村は、高校進学から村外での生活がはじまり、大学進学や就職をきっかけに村外へ出ていってしまうことが課題となっている。生活や交通などの問題で、より利便性の高い都市部に憧れる一方で、自然豊かで人々が温かい自分の村も大切にしたい中学生たちが、村外の人と関わる時に筑北村の何を語るのか。ほかの地域にはない素晴らしい歴史や文化財があることを伝えることで、生徒の中に潜在的にある「ふるさとを愛する心」が生まれ、社会参画しようとする態度も育成されるのではないだろうか。

協力者の存在も欠かすことができない。小瀬さんがいなければイベントの開催は絶対になかったというほど必要不可欠な存在であった。小瀬さんは、隣村麻績村の住民であるが、「村単位」ではなく、「地域」を思う気持ちを非常に強くもっており、対話の中で「地域を良くしたい」という思いをひしひしと感じてきた。そんな小瀬さんと「中学生が中心となって善光寺街道を歩くイベントをやろう」と夢を語って2年。イベント開催で街道を紹介し、さらに地域と一体となって地域を盛り上げるマルシェも開催して夢が実現した。笑顔で中学生とともに歩く小瀬さんの姿を見て、私はすべてが報われた気持ちになった。ウォークイベントのような、大きな行事を成し遂げるには、心強い協力者の存在も不可欠だろうと実感している。地域に協力者がいることで、教師が入れ替わったとしても持続可能なものになるのである。

本稿は、第1回目のイベントの反省会を終えた後の、3年生の生徒と会話で終わりたいと思う。「卒業してもイベントの手伝いに来てね」と声をかけると「もちろんです。ずっと続くといいですね。」と答えた。その時私の頭に善光寺の御開帳が浮かび、「御開帳の時に100人以上を集める大きなイベントができたらいね。御開帳をこれからの目標にするか。」という、生徒は微笑みながらこう言った。「御開帳は去年でしたね。じゃあ、あと6年もありますね。」この「6年もある」という言葉から「6年もあるから大きなイベントに育てられる」という思いや期待が読み取れた。さらには「中学を卒業してからも関わりたい」という思いも表情に表れていた。事実この生徒は、第2回イベント当日は部活動の大会で参加できなかったが、村内外の各地にポスターを貼ったり、卒業生にイベントの連絡を回したりして、卒業後にイベントに様々な協力をしてくれた。また、当日は善光寺街道グループの卒業生5名も応援に駆け付けた。今年度の3年生からも「来年は高校生としてどんな協力ができるんだろう」という声が聞こえているのだから、この地域の生徒や卒業生の力でイベントはより良いものになっていくと期待できる。

御開帳に合わせた善光寺街道のイベントが、中学校と地域の夢になってくれたら、それが本校の総合的な学習の最高のゴールになるだろう。